アメリカシカゴの教育事情

前シカゴ双葉会日本語学校全日校シカゴ日本人学校　教諭
山形県東置賜郡高畠町立屋代小学校　教諭　須　貝　　渉

キーワード：現地校の教育、アメリカシカゴ、教育事情、人格形成、日本の教育との比較

１．はじめに

アメリカ合衆国シカゴに居住して、人々に触れ合うと、自己表現に長け、フレンドリーな気質をもっているなど、様々な面で一般的な日本人との違いを感じた。その違いはどこからくるものなのか。そこには教育が大きく関わっていると考えた。そこで、アメリカの現地の教育事情を調査、研究し、人格形成における日本とアメリカの教育の相違点やそれぞれの良さを検討した。ここにその概略を紹介する。

２．現地校の教育の実際と日本との比較

(1) 子供の豊かな情操、自己表現力を育む指導・環境

街中の至る所で、見ず知らずの人同士の会話が自然に始まる。とてもフレンドリーで、またお互いを思いやることができる人が多いと感じる。また、自己表現に長け、気持ち的にもオープンな人が多い。これらの要因として、幼少期から行われている、劇、歌、ドラマ、ダンス、リーディング、パフォーマンス、発表、演技表現を重視した教育の作用が考えられる。視察した学校でも「ドラマ」という教科の中で、演劇や自己表現などの活動を行ったり、発表や表現を重んじたりして表現力を育んでいた。また、吹奏楽や絵画、歌などの芸術に関する教育にも重きを置かれていた。さらには、それらの長けた芸を発表するタレントショーというイベントも行われるほどである。これらのように自己表現をすることが当たり前の環境の中で、子供たちの自己表現力が磨かれ、高まっていくものと思った。

また、視察した学校ではどの教科、どのクラスでも机は常にグループで座る形になっており、いつでも話し合いや協力した活動が行うことができるようになっていた。一斉授業の中でディスカッションを行う授業も学年が進むにつれて多くなっていた。日本の教育と同様に関わりを持たせ、学びあう力を育む指導が重視されていることを感じられた。

(2) 集中を重んじた学習指導

視察した学校はすべてのクラスが少人数であった。23名を超えるクラスはなかった。さらにクラスによってはサポートする教員やボランティアの保護者などが入っていた。そのため、教員は個々の学習状況をしっかりと掌握し、適宜個別指導を加えることができていた。そして、どのクラスでも私語をする子供はおらず、学習活動に集中していた。

現地の学校では、集中していれば姿勢などは問われない。お菓子を食べながら学習してもよい時間を設けている学校もあったが、食べながらでも活動への集中は崩れていなかった。

また、掲示物にも力が入っており、学習環境を重視していることも伺えた。既習事項の掲示、基本内容を示した掲示、約束ごとについての掲示、学習活動の見通しを持たせる掲示など、さまざまな掲示がなされていた。子供たちはこれらの掲示物からも、ここが学習する環境であることを感じ取り、集中につなげているものと思われた。

(3) 読書環境の充実

どのクラスにも図書コーナーが設けてあり、気軽に図書に親しめる環境が整っていた。マットが敷いてあったり、ソファーが置いてあったりする教室が多く、子供たちは床に寝そべるなど思い思いの姿勢で静かに読書に専念していた。図書室も充実しており、子供たち自身のおすすめのコメントを書いた付箋を本に張って展示するな

どの工夫をする学校もあった。

また、すべての子供の机に本を入れてあるクラスや、理科の学習中でも空いた時間に読書をさせているクラスもあった。

地域の図書館も多くの蔵書をもち、内容も充実している。100冊の貸し出しが可能であったり、あらゆる年齢向けの読書会があったり、絵本の世界の展示物を作って興味を引いたりするなど、本に親しむ環境が整っていた。

日本でも読書で豊かな情操を育む取り組みすることが多いが、現地でも同様の取り組みをしていることが伺えた。

(4) 個別指導とＩＴ機器の活用、掲示

現地の学校では、個人の学習状況を掌握して、適宜個別指導の時間を設けていることが伺えた。多様な国籍の子供たちが集まることで、学習状況の差も大きくなる。それを取り出し指導や、別教室を設けての指導、一斉授業の中での補助や別教員による支援などで補っている状況がある。

また、エレメンタリーからタブレットやパソコンなどを用いた学習が多く、IT機器の扱いに慣れ親しんでいる。ミドルスクールではさらに3Dプリンターやプログラミングソフトを用いた高度な学習もしていた。これらの学習は日本の情報教育よりも数段先を進んでいるものと感じた。

(5) 自己責任を明確にする指導

書籍より日米の育児感の違いを知った。日本は「性善説」、アメリカはもともと「性悪説」をとり、「心の邪心を砕く」育児感であったが、現在は「発達段階」を重視する考えになっているそうだ。しかし、現地の教育を見学し、「性悪説」の考えはいまだに残っているように感じた。各学校では徹底した規律と違反した子供への明確な対応をしていた。例えば、学期に3回まで忘れものは許されるが、それ以上は許さないということを徹底するために忘れ物をした場合に記入させるカードを配るクラスがあったり、問題行動を起こした場合の第一段階は校長室、第2段階としてソーシャルワーカー、最後は退学、と対応を明確にしたりする学校もあった。これらは学校の教員全員が理解し、同一歩調で対応していることが伺えた。

しかし、先生は厳しいかと聞くと皆優しいと答える生徒が多く、子供にとっても明確な規律と対応は安心して学ぶ環境を作り上げていると感じた。

また、ある学校では「年齢を追うごとに子どもにどんどん責任を持たせるようにしている」と、発達段階に応じて精神的自立を促していることも伺えた。この学校では、生徒が視察をサポートしてくれ、生徒たちの真摯な対応に精神的な成長を感じた。

日本の学校は、学級崩壊状態の学級があったり、私語が絶えない学級があったりする。その状態は現地の学校とはかけ離れていた。今の日本の学校も規律と明確な対応を学ぶべきだと感じた。

(6) 国際感覚を養う

現地の学校のあるクラスでの子供たちの国籍は12か国以上であった。まさに、「人類のるつぼ」を感じさせられた。こちらでは学習として中国語や日本語などの他言語を学ぶだけではなく、普段から多様な文化に触れる機会を多く持っている。生活の中でも、自分の国の文化を紹介するイベントや活動も多くあり、おのずと国際性を意識させられる。また、ロシア系や韓国系の食品店、多様な国のレストランが身近にある。アメリカにいるだけでも、世界についての認識を深めることができる。

最後に訪問した学校では日本語を教え、また、その文化や生活様式を教えていた。日本文化を教えることを学校の特長として、通学者を増やすマグネットスクールとしての役割をもっていた。こうした他文化を教え国際性を養うことは、現地においても重視されているものと感じられた。

また、交換留学や、短期留学などの制度も多く設けてある。このようにして、国際感覚が豊かに養われている

と感じた。

(7) 教師の専門性を発揮する

授業中の活動は、すべて教師の直接的な指示の元に行われている。それ故に、教員の専門性も高い。クラスの担任は年度が変わっても 4 年生を教える「4 年生のスペシャリスト」だったり、音楽の教員もドラム奏者が従事していたりすることが多い。

ただし、教員は授業が終わったらすぐに帰り、4 時前には学校には誰もいない状態になる。完全に分業化されており、事務仕事などは事務が行い、教員は教えることに専念できる状況がある。また、前述したように自分の責任下では十分な配慮をするが、その外での子供の行動には関わらない。問題行動も注意を与える程度のことは、教員で話し合いながら対応していくが、それ以上はスクールカウンセラーに委ねるようにしている。

これらは、全人的に子供の教育に関わる日本の教員の立場とは大きく異なるものである。その違いの良し悪しを十分に知ることはできなかったが、多忙な日本の教員とは違い、教員が教えることに専念できる状況はうらやましく思った。このように教員が授業に専念できる状況は、子供によい影響を与えるものと考える。

(8) 学年区分

現地では、年長から義務教育を行い、中学 2 年生までの区分は学区によって違うが、中学 3 年の年から 4 年間はハイスクールであることで統一されている。ある校区では、年長から中 2 までがエレメンタリー、またある校区では、年長から小学 6 年までをエレメンタリー、中学 1 年 2 年をミドルスクールとする分け方をしていた。中学 2 年生は思春期であり、心理的に不安定な時期である。この学年を最上学年とし、中学 3 年からをハイスクールとする分け方は、発達心理の上でも有効な分け方と感じた。現に、視察したミドルスクールでも、中学 2 年生が率先して視察教員を案内し、上学年としての役割を果たしていた。

3．学校外で子供達を取り巻く教育事情

(1) 親が教育の中心

現地では 13 歳以下の子供は親の保護下におかなければならない。子供を一人にしておくと、法律により警察に捕まることになる。現地の子供達の人懐こさは、このように親の保護下で十分に満たされた環境で育ったからこそ、培われたものではないかと考えた。

また、通わせる学校の選択権は親が持っている。現地では持ち家をもっていても同じ地域に長く住むということが少なく、家庭の状況などに合わせて地域を選び、引っ越しを繰り返すことが多い。教育費のほとんどは、固定資産税から補われているため、住む場所の選ぶ権利が学校を選ぶ権利につながっている。不動産業者は学校の状況を把握しており、学校区によって住む地域を勧めることが多い。また、私の住んでいたアーリントンハイツ地区の学校は人気が高く、さらに教員の就職希望も多いという状況もあった。

このように、子供にどんな教育を受けさせるかという選択権は親に大きく委ねられているのが現地の現状である。だからこそ、教師はほめるだけのことが多く自分の責任外では子供たちに口を出さない状況があるようだ。強制はできず、勧めることに留まっているそうだ。しかし、逆に、両親では日本のように「先生任せ」にはしない。しっかりと親が責任をもってわが子を教育していることが伺える。

(2) 奉仕の精神

こちらでは、大学入試や就職採用などで、どんなボランティアをしてきたかが問われることが多いという。現に、街中では高校生が車の洗車のボランティアをして寄付金を募ったり、教会での子供達の活動の補助ボランティアをしたり、ボーイスカウトの活動でボランティア活動をしたりするなど、様々な奉仕活動をしている様子がある。私自身も教会でのホームレスの方への給仕のボランティアをさせていただいたが、こういった活動を通して学ぶことは多いものと思う。ぜひ、日本でも取り入れたい視点であると思った。

(3) キリスト教の存在

日曜日になると、現地の教会の駐車場は車でいっぱいになる。教会では礼拝や日曜学校などが行われ、多くの

人々がこれらに通っている。私自身も教会の活動にいくつか参加させてもらう機会があったが、触れ合う人々は親切で奉仕の精神にあふれているように感じた。

日常の中でも、店の中でくしゃみをしたら、必ず誰かが「ブレス　ユー（神の息をあなたに)」と声をかけていたり、食事の前には神への感謝のお祈りをしていたりして、キリスト教の精神は大きな影響を与えているものだと感じた。

現地の学校で感じた子供たちの親切さや明るさは、教会で感じるものと相通じるものがある。現地の子供たちの人格形成にキリスト教の存在が大きく関わっていると考えられる。

４．最後に

交流学習のおりに現地校の子供たちから「日本人はなんでこんなに親切なの」と聞かれたり、宿泊学習をしたホテルの従業員やスクールバスのドライバーから「なぜこんなに礼儀正しいのか」と聞かれたりしたことがあった。日本人学校の子供たちもそうだが、礼儀正しくやさしい気質が日本人にはあると感じることが多かった。
これらは日本の良さであり、他にも集団の規律を守り、和を大切にするところも日本人の特徴であると感じた。
現地の教育から学ぶことも多いが、日本人学校の子供たちとともにこの地で過ごすことで、日本の良さにも触れることができた。

技術の発達により世界が身近になり、今後更に国際感覚を培っていくことが必要とされるだろう。この３年間で触れることができたのはアメリカの現状のほんの一端に過ぎないかもしれないが、ここで学んだことを今後の教育の中に役立てていきたいと思う。

また、日本の教育の良さについても改めて認識し、その良さも明らかになってきた。研究をここで終わらせるのではなく、本国に戻った後も、ここで感じたことを振り返ることで、日本の教育の良さをさらに明確にし、さらには、現地の教育の良さを活かしていきたい。

最後に、今回の派遣を通して得られた多くの貴重な出逢いに感謝するとともに、派遣に当たってお世話になった多くの方々に心からお礼を申し上げたい。